

自然観察会報告
三保のビーチコーミング
高田 歩



図1 波打ち際で魚を探す参加者

新年を迎えた1月17日の日曜日、三保の飛行場周辺（外海側）にて観察会をおこないました。当日は快晴でしたが風が強く、寒さと闘いながら総勢12人が三保海岸を練り歩き、海岸に打ちあがった生き物の死がいを中心に拾い集めました（図1）。

観察会では、魚類は東海大学の高見宗広先生、貝類は高山壽彦先生、岩石は横山謙二先生にこの日集まった拾得物について解説していただきました。

今回集められた魚類は、体長1mほどのミズウオ（図2）と体長4cmほどのヤベウキエソという深海魚2匹だけでした。海岸に打ちあがった魚は鳥や猫などに食べられてしまうため、朝早くに行かなければ多くを見逃してしまいます。日の出直後から観察すればより多くの種類が見られたかもしれません。

貝類では、ヨメガカサ、ベッコウガサ、カモガイ、キサゴ、エビスガイ、ツメタガイ類、メダカラ、チャイロキヌタ、レイシガイ、イボニシ、クリフレイシ、シマミクリ、ヨフバイ、ムギガイ、コロモガイ、ナガニシ類などの巻貝、ベンケイガイやムラサキガイ、フナクイムシなどの二枚貝が採集されました。中でもフナクイムシは、数ミリの小さな貝殻をもつ穿孔貝で、根気強く探さない限りは発見できないことでしょう。もし興味があれば、穴だらけの流木を探してみると穴の中から見



図2 ミズウオ



図3 石の解説をする様子

つかるかもしれません。

岩石では、蛇紋岩、頁岩、砂岩、凝灰岩が主に見られ、まれに軽石が見られました（図3）。ほとんどは安倍川由来の岩石ですが、軽石は安倍川上流に見られないため、由来が不明なようです。レンガやガラス片などと同様に、人為的な原因で流れ着いたのかもしれません。

漂着物は以上のほかに、エボシガイの仲間やクロフジツボ、スナヒトデ、クルミなどの種子、さらには船の浮きや長靴などの人工物までさまざまに見られました。私たちは、波打ち際にもものが落ちているのは当たり前だという感覚になってしまいがちですが、その一つ一つをよく見ると新たな発見が多いことでしょう。